

ス地帯になり、綿花、ブドウ、クワなどの豊作地になったと聞いて感慨無量である。

思い出の数々

熊本県 安田 剛

私が終戦を迎えたのは、満州奉天飛行場近くで、当時、陸軍の最新鋭機「百式司令部偵察機」の整備を担当するため、八野航第二独立整備隊として展開中のことでした。

何日かたつて飛行場にソ連機が飛来、私たちの部隊は武装解除。その後隊員の不安がつり、五名ほどは南下を決意して徒歩で隊を離れた。彼らのその後の行動は不明です。

残りの者は周辺の部隊と一緒に奉天競馬場―铁路学院に集結させられる。そこには一般の人たちの姿も多数見かけることがあった。

そこで列車に乗るための編制が行われたが、私は工

業学校の建築科卒のため、軍の建築課の軍属の方と同じ小隊に入れられ、作業第二八大隊に編入される。それで、同じ隊の者とは別になる。

私たちは、九月中ごろ、奉天出発―ハルビン経由でソ満国境の黒河に十月初めに着く。そこからソ連領に渡り、貨車に乗せられ、長い苦しい旅が始まりました。そして、旅の終着点は中央アジア・ウズベク共和国のタシケント、昭和二十年十月の末でした。

タシケントの収容所前に並んだとき、あの入り口の門の重い扉、そして、周囲に張られた鉄条網、四隅の望楼を見たとき、いよいよつらい地獄の生活が始まるのかと思ったとき、不安が胸いっぱいになり、いつしか目に涙したのを今でもはつきりと思い出すことができます。

収容所での作業は建設作業ということでしたが、最初に連れていかれたのが広い畑の中、何のことはないケール埋設のための穴掘り。その日のノルマを示されたので、最初ではあるし、みんなが助け合いながら、ほとんど目標どおり頑張って安心していたら、翌日は

その何割増し、次の日はまた何割増しとノルマを上げるので、いつまでたつても達成できず、監督のズルサを恨みました。

次は駅構内で貨車から木材を下ろす作業。シベリアから直接送られてきた物で、七、八人いて担がねば動かない大木、みんなの呼吸が合わないと危険な作業。私の班で不手際があり、私の親指が材木の間にはさまり負傷したので、翌朝、医務室に行き、女性の軍医大尉の診療を受けたが、熱がないので休ませない。仕事に行けとソッケない返答（医者知識なんてゼロ）。他の人たちの中にも神経痛、脚気、その他、熱の出ない病気の者は皆このような状態で苦しめられたものです。

満州から履きつ放しの靴は、手入れもできず、修理もできないので交換品を請求したら、何のことはない、下駄靴をくれたのです。底の部分が木、それに上部がズックの物を釘でとめた物です。底が弾力性がないので、突っ張ったままその靴を履いて、次の作業場まで片道三十分、おまけに仕事がレンガ運び。一日じゅう

歩きづめなので、夜になると足首とひざから下が痛み、泣かされる。

冬の屋外点呼も苦しみの一つに挙げられる。全員を五列縦隊に並べてソ連の日直将校が数えていくのだが、何回やっても数が合わない。寒さはスキツ腹にこたえるし、手足はチヂカンでくるし、泣きつ面に蜂の状態でした。当時のソ連将校の程度なんて、そのくらいのものでした。

食べる物も十分に与えず、ノルマノルマで働かされ、私の体も限界状態になっていたであろう二十三年の初め、日本の軍医（名前は残念だが覚えていない）が来られたので、早速診断を受けたが、そのとき「うそも方便」とあることないことを申し立てた。その結果、旧軍隊で言っていた保護兵扱いに指定され、その後は、食堂の掃除その他の軽作業につくようになり、後では、一週間ぐらいかけて、ソ連の軍属と一緒に七人くらい、奥地の草原に食糧にするための松茸のようなものを取りに行けるまでになったのです。

結局、保護兵になったおかげで帰還人員には一番に

選ばれ、その年の六月ごろタシケント―ナホトカ經由で、無事日本に帰ることができました。

今になってつくづく考えてみると、約三年間、苦勞にもめげず耐え抜いた強い体に育ててくれた両親に感謝するとともに、保護兵にしてくださった軍医殿が救いの神のように思えてならない。

あのような出来事が二度と起こってはならない。子供や孫たちがあのような局面に遭遇したとき、そのようなことを考えると恐ろしくなってくる。人並みの生活ができればよい、平和の尊さを深くかみしめて平和を祈っております。

現住所 熊本県下益城郡城南町藤山五二〇

生年月日 大正六年八月十七日

入 隊 昭和十三年八月一日 歩兵二三連隊

終戦時の居住地 満州国奉天市

入ソ日 昭和二十年十月九日

抑留地 タシケント

作 業 建設現場の雑作業

引揚年月日 昭和二十三年七月十二日

ソ連抑留

神奈川県 香坂 毅

満州奉天文官屯九二八部隊で終戦を迎えた一週間後、マンドリン（自動小銃）を肩より掛けたソ連兵が、十数台のトラックに分乗し進駐して来た。私は、ソ連統治下になって一カ月後、日本に行くことを決し数名と逃亡する。しかし二日目、運悪く八路軍と遭遇し、全ての金品を略奪される。終戦とともに、日本人を大人（たいじん）と尊敬、従順にしていた満人も、手の平を返すように変心し、暴行略奪の限りを尽くし、果ては殺人まで、日本人はどこにいても命の保証はなく、治安の悪さは想像を絶する世相だった。

このようなところにはいはいずれ死を待つだけだと考え、窮余の策として部隊へ逆戻りしたが捕われ、九月二十八日、北陵収容所に連行される。皇姑屯駅こうこ屯より有蓋貨車に詰め込まれ、家畜同然の扱いで輸送される。